

刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察

—楽器説をめぐる諸問題について—

木川正夫

はじめに

考古遺物の中に“刻骨”と呼ばれるものがある。これについては、木村幾多郎氏が『弥生文化の研究』8（文献59）の中でかなり詳しく研究発表されており、その中で木村氏は、

加工された鹿角及び、ウマ・ウシ長管骨に
数条以上の平行短沈線を素材の長軸に対して
直角に深く明瞭に施した加工品

を“刻骨”として検討対象にしている。地域的には韓国南部と日本の関東～九州、時期的には韓国ではBC 2世紀～AD 5世紀、日本では弥生後期～8世紀にかけての遺跡において発見される。筆者（木川）もこの遺物に興味を抱き、集成を試みた結果、1998年末現在で韓国のものが8遺跡17例（第7表）以上、日本のものが28遺跡36例（第6表）以上存在することが分かった。その内愛知県出土例は最多で、8遺跡12例に及ぶ（なお、文献45によると高蔵貝塚からは計5例出土しているらしく、愛知県出土例は合計8遺跡14例となる。また岡山市出土例は文献48によると計5例らしく、よって日本の刻骨出土例は総計28遺跡39例以上存在すると考えられる。）。また、愛知県は日本最古（明治41年）の刻骨出土例（高蔵例Ⅱ類）があり、刻骨研究の出発点となっている。

さて、この“刻骨”の用途であるが、一部（I c類）は刀装具であると考えられる。しかし、その他の大部分のものは用途不明のままである。いくつかの説は出されているが、その中で有力なものに、楽器説がある。『弥生文化の研究』8（前掲）の中で、水野正好氏が「楽器の世界」（文献71）を書かれており、そこで“刻骨”＝ササラ（日本にササラと名のつく楽器が二種あり、一つはスリザサラ、もう一つはビンザサラである。こ

の場合はスリザサラ。）であるような楽器説を展開されている。さらにそう考えた上で、水野氏は次のように指摘している。

一方、木製品の世界にも、同様ササラゴと考えられる遺品が辿れる可能性がある。滋賀県大津市湖西線関係遺跡群の調査で発見された木製品がそれである。・・・おそらくササラゴ（箆子）としての機能を与えることが出来るのではないかと考えられる。この種の例は各地で発見されており、奈良、平安時代から中世に至る諸遺跡で見ることが出来る。最古の例は6世紀後葉に属する先述の大津市の一例であるが、この種の類例が骨器の存在と相俟って弥生時代に遡り得る可能性は十分にあるであろう。竹を細く割ったササラ（箆）で擦ることによって音色を生むのである。

上記の例の遺物は報告書（文献14）で確認できたが、「中世に至る諸遺跡で見ることが出来る。」というので、それ以外は自力で調べた。中世といえば、田楽が盛んに行われていた時代であり、スリザサラの使用も、絵巻や古文書から確定している。しかし、スリザサラの起源とそれまでの系譜は解明されていない（ビンザサラは中国の拍板に由来することがほぼ確実視されている。）。さらに6世紀後葉といえば、刻骨がまだ使用されていた時期であるから、これら三者（刻骨→鋸歯状木製品→今日いうスリザサラ）を並べると、弥生時代から今日に至る連綿としたスリザサラの系譜がたどれるのではないか。また、三者の中間におかれながら研究のほとんどされていない“鋸歯状木製品”についての研究をすることは、非常に意義深いことと考え、出土木製品関係

の書を繙き研究を始めた。なお、筆者は1990年、『民具研究』87で「刻目のある木製品について」（文献70）という小論を発表している。今回の小論では、その時の文章を大幅に改変し、新出土例や他の研究者の研究成果等を追加した。また、地元愛知県の立場から、刻骨との比較についての部分に重点を置いた。

1. 鋸歯状木製品の研究史

この遺物については、研究と呼ばれるようなものはほとんどない。1997年に増田修氏と横山妙子氏の集成された「『ささら』に関する参考文献目録」（文献72）とその「解説」（文献73）の鋸歯状木製品の項に拙論（文献70）以降追加された数例の報告書名等が紹介されている。また、『木器集成図録』に近畿古代のものが12例（文献8）、近畿原始のものが6例（文献10）集成されており、若干のコメントがなされている。以下に記す。

（近畿古代編1984年）・・・用途不明品

刀剣の形をした材の側面に鋸歯を刻んだ木器。柄と身からなり、身の両側もしくは片側に歯を刻む。身の両側を薄くして両刃状につくるものと、側縁を薄くせず、片側だけに歯をつけるものとに区別できるようである。水野正好はこの鋸歯を竹を細かく割ったものなどで摩擦してザラザラとかシュッシュッとか音を出す「ササラ」にあてているが、必ずしも従いがたい。

そしてその注には次のようにある。

中国のオロチョン族は歯を刻した同形の木器を皮の肉や脂肪をとる皮なめし用具として用いている。

（近畿原始編1993年）・・・用途不明品

備考欄に「摺り簾か」

このようにこの遺物には統一名称がなかった。（例えば各報告書には「刻みのある棒」「刻みの

ある木製品」「刻目をいれた木器」「叩き棒」「叩き板」などの名称が使用されている。）木製品であるがゆえに完形で出土することが少なく、取り扱う範囲が漠然としていて集成しにくいのである。最近、鋸歯状木製品という名称が定着しつつあるので、本論でもこの名称を使用する。鋸歯状木製品といっても、私が集成した以外にも大きさまざまあり、刻目のつけ方も多様である。その中には具体的に用途の分かっているものものもちろんある。そんな中で私が集成するにあたって基準にした“鋸歯状木製品”の定義は、

加工された棒状の木に数条以上（螺旋状のIVb'の場合は1条）の刻線密度（刻線範囲[cm]÷刻線数）が0.4～3.0cmの平行沈線を素材の長軸に対して直角に深く明瞭に施した木製品

ということである。刻線密度を0.4～3.0cmと限ったのは、0.4cm以下なら例がなく細工が困難であると思われること、3.0cm以上なら竹の断面直径から考えてササラ竹で鳴らすことが困難になるからである。さて、そのような形状の遺物を可能な限り60例集めた。型式分類等をする上で、補足のために民俗例や絵画資料等を加味し、資料対象を増やして考察した。

2. 鋸歯状木製品の型式分類と年代比定

60例を、主として年代順に並べて第4表（寸法の単位はcm）のように型式分類と年代比定を試みた。その基準を第1表に示した。また、実測図等の図を第2～5図（図中の各数字は第4表の遺物番号に対応）に示した。さらに、後に触れる刻骨も含めた時期的分布表を第3表に示した。

IVb'の螺旋状のものは1点しか出土例はないが、中世の絵巻（『黒谷（法然）上人絵伝』、『大山寺縁起絵巻』）には、螺旋状と目されるササラゴが使用されていることから、これに直接つながる

ものではないかと考えて加えた。実際、現在の日本の民俗例でも、螺旋状のササラゴは多数見られる。須藤功著『西浦のまつり』（文献74）等を参照されたい。

日本の民俗例では、螺旋状以外にも、木の棒にリング（輪）状に刻目を施すもの（IVb）があり、絵巻中のササラゴもその形態であると考えられなくもない。しかし、螺旋状はリング状に比べて折れにくく丈夫であり、製作もしやすいのでより多く作られたと私は考える。

3. 鋸歯状木製品の用途

鋸歯状木製品は報告書には、ほとんどが用途不明木製品として掲載されている。しかし、中には用途を推定しているものもある。なかでも有力なものは次の五説である。

3.1、叩き棒説・・・（文献6、12）

3.2、皮なめし用具説・・・（文献8）

3.3、斎串説・・・・・・・（文献8）

3.4、編台の目盛板説・・・（文献2）

3.5、ササラ説・・・（文献14、71）

鋸歯状木製品の全てが同じ用途で用いられたとは限らない。私はササラ説を支持するが、全てがササラとして実際に使用されたのではないと考える。しかし、そのうちのいくつかはササラとして確かに使用されたに違いないと考えている。

次に各説について検討を加えたいと思う。

3.1 叩き棒説

叩き棒とはいかなるものか、考古関係の文献を調べても記載はない。民俗関係の文献には“タタッポ”“タタッポウ”などという名称で記載があった。鹿児島黎明館の『鹿児島の歴史と文化』（文献75）の中に収穫用具として、写真と次のような解説がある。

タタッポ 使用地 始良郡始良町春花

長さ・・・115センチメートル、

先端部の直径・・・7.5センチメートル

〔材料・形状〕打ち棒のことで、ほどよく湾曲している杉の自然枝を用い、握りの方を細く削ってある。底には効率をたかめるために、約5センチメートル間隔に8個の切りこみが入れてある。〔使用法〕ナタネ、アワ、ソバ、大豆などの脱穀に用いる。

〔備考〕使う目的によってアワウチボウ、マメウチボウなどともいう。

また、小野重朗氏は「基本的脱穀民具」（文献76）の中で、鹿児島県を中心に分布するこの“タタッポ”について次のように触れている。

打ち棒、叩き棒で、一本の棒を脱穀に使うもの。主として使う目的によってアワウチボウ、マメウチボウなどという。長いもので2メートルほど、短いものは40センチメートルほどだが、150センチメートルほどのものが一般的、叩いた後、それを後ろに引いて、片手で体の後ろで回転して両手で叩く・・・。

この棒の分布は薩摩・大隅両半島部からその基部まで広くみられるが、中間に大きな欠如部がある。始良郡、国分市、菱刈町、大口市の一続きの地帯である。この中間部を間に二つの分布圏に分かれるが、薩摩側は細長くあまり曲がらないものが多くみられ、ツバキ、ユス、カシなどが材料となり、タタッポと言う傾向があるのに対して、大隅側は太く、あまり長くなくて、曲がっているものが多く、杉の枝部がよく使われる。ウチボウとかマガイなどとよぶことが多い。分布は南の島にも点々とあり、北にも続いてみられる。

以上である。こちらの方は、刻目については触れていない。刻目のある物とない物があるのであろう。さて、鹿児島県周辺の叩き棒についての記述となったが、鋸歯状木製品が上記のよう

な叩き棒として使用できるかどうかを考えてみたい。

まず、大きさ（長さ）の点である。鋸歯状木製品は極端に長いものを除けば平均30～40cmである。叩き棒は短い物でも40cm、平均150cmであるから、鋸歯状木製品を叩き棒に仕立て上げるのはかなり無理がある。

次に、刻目のつけ方であるが、『鹿児島の歴史と文化』の写真の例は刻線間隔が5cmであったが、鋸歯状木製品では0.4～3.0cm間隔であり、比較にならない。さらにその写真の例は、面的に刻目が入れているのに対して、鋸歯状木製品でそのような形態が見られるのはⅠb類とⅢb類の計6点だけである。

次に反り方の問題だが、叩き棒は脱穀するものを地面に置いて叩く関係上、反っているのが普通である。しかし鋸歯状木製品では、反った例は一例もない。

以上の数点から、鋸歯状木製品を叩き棒として使用したという説は不適当だと考えられる。

3.2 皮なめし用具説

『木器集成図録』（近畿古代編）の注に、この鋸歯状木製品が皮なめし用具として使用されたのではないかとしている。そこに参考文献として掲げられた『中国原始社会史』（文献77）を見ると、工具の図が載せられており、オロチョン族（鄂倫春族）の皮なめしの一工程にこの工具を使用し、皮の肉や脂肪をとるらしい。また別の文献（文献78、79）によれば、この工具は“毛丹”と呼ばれる。また『鄂温克人原始社会形態』（文献80）には、エヴェンキ人もこのような工具で皮をなめすことが書かれている。寸法は明示されないが、『鄂倫春族』の実際に使われている所の写真を見れば、40cm程度の長さであることが分かる。さて、鋸歯状木製品が“毛丹”として使用されう

るかどうかを考えたい。長さの点では毛丹の方がやや長い程度であり問題にはならない。刻目の間隔もほぼ同じくらいである。刻目のつけ方も鋸歯状木製品に多く見られる木刀形である。しかし、決定的な難点が一つある。それは、握り部の問題である。毛丹は両手で使用される関係上、握りは左右両端にある。しかし、鋸歯状木製品ではそのような例は一例もなく、一方にのみ握りがつく。

以上のような理由で、この説もふさわしくないことがわかる。

ところで、毛丹のような皮なめし用具は、『西洋職人づくし』（文献81）にはよく似た物がもちいられているようだが、日本では職人尽絵などのどんな絵画資料を調べても使われた形跡がないようであるということを付け加えておきたい。

3.3 斎串説

『木器集成図録』（近畿古代編）には斎串として分類されている物の内、D型式の一部を私は鋸歯状木製品のⅢa'に分類した。本文の遺物解説にも「斎串でないかもしれない。」とされているからである。他の斎串の両側に切欠きをいれる物に比べ刻線間隔が密であり、斎串分類のCⅦやCⅧ型式のような切込みもいれていない。これらを斎串とするのは不自然と私は考える。

3.4 編台の目盛板説

遺跡出土の編台の目盛板は刻目の粗いものが多いが、細かいものもある。全体像は長く、両側の空白部が均等にあるので鋸歯状木製品とは区別できる。しかし、その断片が全く編み具関係の遺物と共伴なく単独で出土するとどちらとも言えなくなる。私が集成した中にも目盛板の断片が紛れ込んでいるかもしれない。

3.5 ササラ説

はじめに述べたように、鋸歯状木製品にはスリザサラのササラゴのように使用されたという説がある。最も強調されているのは水野正好氏だが、大いに筆者も賛成するところである。その根拠としては次の二点が挙げられる。

一点目は、長さが手ごろで握り部もついており、民俗例や絵画資料のものとよく合うということ。そして二点目は、筆者が実際にこれらの一部、三ツ寺の2例、平城宮下層例、鴨例、鶴岡のIVb'類の例を原寸通り複製し、竹を細かく割ったササラ竹で擦ってみたところ、十分楽器としての役を果たすことのできる音が出た、ということだ。

次に、この説について不利な点や反論を挙げてみる。

最大の難点は、ササラゴの方ばかり出土して、擦る方の側のササラ竹の出土例が2例しかないことであろう。しかしこの点は、擦る方の側が竹製であると考えれば跡形もなく腐蝕することが予想されるので、あまり問題にはならないであろう。そんな中で近年、佐賀県生立ヶ里遺跡で茶筌状竹製品が鋸歯状木製品と約30m離れた同時期の遺構で発見されたこと（文献31）はササラ説を支持する有力な根拠となった。

次に、小島美子氏におききしたところ、私の示した鋸歯状木製品のうちのいくつかはササラゴとして使用した可能性が高いとされた上で、一つ疑問なのは、どうしてあえて厚みを薄くして木刀状にするのが多いのかということだった。筆者もこの点については答えあぐねたが、今では次のように考えている。すなわち、円柱状や角柱状の材なら刻目を入れる労が多いが、平板状ならたやすくすむということである。両者の間には音色の差はあまりないので、労を減らすためにこのような形状を選んだのであろうと考える。

以上のように、ササラ説に不利な点も解消でき

ることから、この鋸歯状木製品の用途としては、全てとはいえないまでもいくつかのものは、スリザサラのササラゴに使用されたと考えられるのである。

4. 刻骨の形態分類と年代比定

これについては、1987年に木村幾多郎氏によって既になされている（文献59）。それ以後増加した出土資料や、見落とされていた資料も、これに当てはめるとほぼ合っているので、筆者もこの分類法や年代比定を踏襲したいと思う。

形態分類表については木村氏のものを一部改変して第2表に掲載させていただいた。

第6・7表（寸法の単位はcm）の刻骨出土地名表については、木村氏のものを基本とさせていただき、新出土品や見落とされていたものを加えた。また、第6図（図中の各数字は第6・7表の遺物番号に対応）に各型式の完形に近い代表例を掲げた。

形態については、自分で明らかに判断できる場合はIa～Icに分類したが、判断しきれぬ場合はIとしておいた。寸法と刻線数については、報告書の実測図とその縮尺をもとにして測定した。木村氏のものもあらためて測定してみたが、明らかなミス以外はそのままにした。

5. 刻骨の用途

木村氏の形態分類において、Ic類は鹿角製刀装具とされている。Ic類は韓国に3点と日本に1点見られる。それらに共通していることは、「刀子柄」又は「刀装具」と報告されていることと、磨滅痕がみられないということだ。これらのことから、私も、Ic類は鹿角製刀装具であると考え。しかし、Ia、Ib類までその考えを及ぼすことは無理であろう。Ic類以外の刻骨は、刀装具以外の共通の用途があったと思われる。その

共通の用途について考察していきたい。

刻骨について初めてのまとまった論文は金子浩昌氏のもの（文献60）であった。その中では、刻目数が20本前後から25本まで位に落ち着くということから、何か呪術的な意義を見出そうとしている。ト占法の一つに陰陽の道があり、数によって陰陽の両儀を説く思想であるが、刻目がその陰陽をあらわす符号ではないかというのである。

木村論文ではさらに用途を多角的に推定している。

a、磨滅痕よりする推定

b、記号としての刻線

c、卜骨説

の3つに分けている。

aでは、I c 類以外の刻骨のほとんど全ての刻線部分に磨滅痕が認められるという事実から、

〈用途1〉・・・何かでその部分を擦った

〈用途2〉・・・刻骨で何かを擦った

の2つにさらに分けている。

〈用途1〉では、スリザサラのような楽器説をあげているが、I 類の鹿角では響鳴部がないのと、刻線範囲が狭いものがあり否定的である。しかし、絵画資料や民俗資料には、ササラゴに竹のような響鳴部のあるものを必ずしも用いているのではなく、むしろ木の棒のような響鳴部のないものを多くササラゴに用いているので、鹿角も十分ササラゴとして使用できると、私は考える。実際、私は鹿角や木に刻目をつけて、竹の先を細かく割ったササラで擦ってみて、そのことを確認した。また、刻線範囲が狭いものも、広いものに比べると確かに鳴らしにくいことはいえるが、音は十分に出ることも分かった。しかし、わざと狭くする必要もないので、極端に狭いものは、別の用途があったのかとも思われる。

さらに木村論文は、楽器説について、「農耕儀礼に伴う儀式に用いられたとすれば祭器具として

の呪術性を認められるだろう。」としている。スリザサラが用いられる囃し田は、農耕儀礼そのものであるし、しからばスリザサラも祭器具であるから、その通りだと思う。

〈用途2〉の根拠は、一つに擦過痕が刻線に平行のものがあることが挙げられる。その件に関して、刻骨を自作してみて分かったことがある。それは、刻目を刃物でつける場合によく誤って稜に傷をつけてしまうことがあり、その痕は割合深くまで及ぶことがあるということで、つまり、ササラで擦って磨耗した後まで残る場合があるということである。さらに、鹿角に刻目を加える前には、顆粒を除くために表面を磨く。その痕が残っているのかも知れない。

さらに〈用途2〉の根拠には、I b、II 類が両手で握れるようになっているということがある。これについては、I a 類が両手で握りにくいいため否定的である。そして、両手で握って何を擦ったかであるが、擦過痕を刻目に平行につけるには前後運動が考えられる。では、その擦られるものは、擦られる方向に刻目のついている棒によって、一体どのような作用が受けられるというのだろうか。何の効果も上がらないと思う。むしろ、やすりのように刻目に直角の方向に運動させた方が、擦られるものにとっては作用は著しく大きいに違いない。それは、ササラを擦る時に刻目に平行に擦っても意味がなく、直角に擦ってこそやっと音という意味あるものを生み出すことができるのと同じことである。

b では、金子浩昌氏の説を踏襲しているようである。

c では、頭から卜骨説を否定しているようだ。その理由は、中国・韓国・日本などの地域で共通の点状焼灼法でト占するには、鹿角は組織上不可能であることから。また、北アジア・中央アジアなどに広がる全面焼灼法でト占するのも困難であ

ることから。また、新田栄治氏の「日本出土ト骨への視角」（文献82）に、民族例に鹿角を使用している例はないとされていることから。さらに、府院洞、生仁、津島江道で典型的なト骨が伴っていることから、刻骨をト骨として使用する必要はないとしている。

反対にト骨説を支持する側の根拠は、いくつかの例に焼痕がある事実である。しかし、焼痕のないものが圧倒的に多いので、焼痕つきのものは例外だといえる。

松山友子氏の論文（文献38）では、木村論文をうけて、〈用途1〉の楽器説と〈用途2〉の道具説の二つを、黎明館収蔵品をもとに、考古、民俗例を参考にして、より発展的に考察している。

楽器説については、私が後で詳述するから省略する。

道具説では、刻骨と似た感じの物にすり鉢、すりこぎ、めん棒、薬研を挙げている。しかし、それらの役割は当時磨石や石皿でなされていたし、わざわざ堅い角を用いなくても木製でも簡単に作れるとして否定的である。そこで角の利点（堅い割にはきめが細かく、繊維状ではない。）を考えると、すりつぶすという用途よりも丁寧に磨きあげたとする方がもっともなので、布のつや出しという用途を提唱している。しかし、この場合も、後にウマの長管骨を使っているので、わざわざ鹿角にめんどうな加工を加えなくても、初めから長管骨を用いればよい、と否定的である。

用途に関して、以上3つの論文における考察とそれに対する私の意見を述べた。そこで、私が述べ足りなかったことを次に記すことにする。

まず、金子氏のいう刻目数の問題について、ササラ説を支持する私の立場から考えてみたい。

民俗例において、ササラ竹の割った本数と、ササラゴの刻目の数の関係に意味を持たせている地域がある。久枝秀夫氏の「大田植の楽器」（文献

83）には、片方を奇数、もう片方を偶数にする場合が多く、奇数の方を男竹（おんだけ）、偶数の方を女竹（めんだけ）と呼ぶ場合の多いことが書かれている。陰陽道では奇数を陽数、偶数を陰数とするから、牛尾三千夫氏が「大田植の楽器」（文献84）の中で次のように結論している。

簾といい、太鼓といい、陰陽二つをすり合わせ、打ち合わすことによって、稲霊の誕生をはやしたことは人間男女和合の生理と同じ意義を有するものであろう。

このことを感染所作（かまけわざ）というが、さらにササラの具体的な民俗例（文献85）を見ると、ササラゴの方を男根状にし茎部に刻目を加えた物や、刻目さえ加えない物まである。そしてササラ竹で茎部をこするのである。いうまでもなく、これは男性の自慰行為を表している。ササラをするということは、元来そのような意味をもっていたと考えられるのではないか。男根状木製品が各地で出土するが、これもひょっとしたら、こすられたのかも知れない。

さて、刻骨に話をもどすが、刻目数が完全に分かるものだけあげてみると、奇数が若干偶数よりも多いことが分かる。後で述べる鋸歯状木製品についても、若干奇数が多い。それらは単なる偶然かも知れないが、このような陰陽思想が働いていた可能性も全くなくはないであろう。現在の民俗例を実際に見聞しても、正確に奇偶に分けたササラを使っている所は少ないので、刻骨が使用されている時点でも既に、奇遇に分ける伝統は崩れていたのかと思われる。

ササラ竹を偶数にするということは、製作上の都合を考えても、必然的にそうなる。つまり、竹を奇数には割りにくいということだ。

さて次に、木村氏の〈用途1〉では、こすられる方をスリザサラのササラゴと考えた訳であるが、こする方はどうなっているのかということ

問題とする。

特殊な出土状況の例として瓜郷遺跡のものがあ
る。報告書（文献34）によれば、出土した2点と
も、

それぞれ刻みをつけていない鹿角と2本1

組になっておかれていた。

とある。ササラ説を主張するならば、当然残りの
一本でこすったと考えたくなる。しかし、はたし
て鹿角同士をこすり合わせて音が出るのだろうか。
この疑問に答えるために私は、鹿角のササラ
ゴを作って確かめた。まずササラ竹ですってみた
ら、普通のササラと同じく音が出た。鹿角です
った場合、太い部分では音が低くきこえにくい。
しかし、鹿角の先端の細い部分でこするとかなり高
い大きな音が出ることが分かった。

さて、刻骨のうち、あるものは鹿角ですられた
可能性があることが分かった。しかし、共伴例が
2例だけなので一般化はできない。他の刻骨は殆
ど全て単独出土である。しかし、ササラ竹の方を
当時も竹製であったと考えれば話は通じる。竹は
百年も土中にあれば、ぼろぼろになるからである。

6. 素材のもつ意味

刻骨がもしササラとして使用されたのなら、何
故その素材を鹿角、牛馬骨に限ったのであろう
か。単に音を出すだけなら、竹や木で間に合う
し、労力もいらない。やはり、素材の選択に何ら
かの意味があると考えざるを得ない。ここでは日
本を中心に考えていきたい。

佐原真氏の『大系日本の歴史』（文献86）の中
では、弥生時代にシカが数多く土器や銅鐸などに
描かれているが、当時の畿内地方の遺跡からはイ
ノシシの獣骨の方が断然多く出土するとのことが
書かれている。このことから、当時シカを特別視
していたことがうかがえる。さらに小林行雄氏は
『図解考古学辞典』（文献87）の中で、シカを神

聖な動物と考える思想は世界的なもので、中国に
も日本にもあるとしている。では、その理由は何
であろうか。

現存の民俗例では、シカやその模型、絵などを
狩猟儀礼や農耕儀礼に用いることがあるらしい。
狩猟儀礼の方は何となく意味が分かるが、農耕と
どう関係があるのだろうか。千葉徳爾氏の『狩猟
伝承』（文献88）には、そのことについて興味深
い見解がなされている。シカの角は年々新しく生
え変わり、次第に分岐して長大になってゆくの
で、生命力の象徴と考え、その生命力を植物に転
移させ、豊作を願ったのではないかとしているの
である。私の考えでは、刻骨は畦し田に用いられ
たのではないかとするものなので、千葉氏の説は
その有力な根拠となる。

このように、鹿角製刻骨は弥生時代から古墳時
代にかけて、農耕儀礼に伴う祭器具であった可能
性がある。では、鹿角から馬骨への素材の変化は
どのように説明されるのだろうか。このことにつ
いては、出土状況をぬきにしては語れない。

大まかな傾向として、Ia～Ib類が住居址及び
土壌、Ib～II類は旧河道や大溝内で出土し獣骨
が伴出している。その境界は、古墳中～後期にな
りそうである。この頃、何らかの信仰の変化が
あったと思われる。木村論文では、6世紀頃から
井戸・大溝内にウマ遺存骨が見られるようになる
現象と考えている。ではどうしてそのようなこと
がなされるようになったのだろうか。『日本書
紀』巻24、皇極天皇元（642）年7月の条に、雨
乞いのために、村々の祝部の教えの通りに、或い
は牛馬を殺して諸社の神を祭ったことが書かれて
いる。少し時代は下り、『類聚三代格』の中に延
暦10（791）年の太政官符が載せられてあり、漢
神を祀るために牛を殺してはならないといってい
る。そのような禁止令が出るほど、こんなことが
流行していたのである。また、『日本霊異記』に

も、聖武天皇の時代に、漢神の祟りを払うために牛を殺したことが、書かれている。このような例から、皇極紀の例も、漢神を祭ったと考えられる（文献89）。6世紀頃から、水と関連する場所で牛馬骨が出土することは、漢神を祭る風習そのものであると考えてはば疑いない。おそらくその頃に中国から伝えられた風習であろう。その後、生産の一角を崩さないためにも、次第に牛馬骨から、土馬、馬形木製品、絵馬へと変貌、簡略化していったと考えられる。

さて、刻骨のⅡ類の出土は、そのような信仰の只中にあったようで、ウマ、ウシ等の遺存骨とともに大溝内から出土する。では刻目をつけることは何の意味があるのだろうか。私は次のように考える。

弥生～古墳時代前期は、『魏志倭人伝』にも見られるように、馬は非常に少なかったと思われる。古墳中期には、古墳の副葬品からも分かるように馬はかなり増えていたと思われる。そして漢神信仰も大陸から入り、雨乞等に馬骨を用いるようになった。そして、以前まで鹿角に刻目を入れて行った農耕儀礼と結びつき、馬骨に刻目を加えて代用することとなった。そして、それが馬骨であるがゆえに、漢神を祭るために水と関連する場所に投げ入れられることもあった、と。

結び

以下に本稿と旧稿（文献70）を通しての私の考えをまとめてみる。

アジアの稲作地帯において、囃し田が田植法開始の時代からあり、田植法の伝播と共に各地に伝わり、それが次第に各地の風土ととけこんで個性化した。初期はもちろん労働効率を高めることが目的であったが、次第に祭祀的色彩を帯びるに至って慣例化し、技術の進展と共に、目的を見失って衰退したと思われる。そして、田植歌のみ

が残った地域もある。

囃し田には、はじめスリザサラによって拍子がとられた。韓国南部の田植えに適した地域では、紀元前後中国から田植方式とともに囃し田が伝えられた。ここでは鹿角を生命力の象徴としていたので、鹿角製のスリザサラを使用して豊作を祈願した。日本には弥生後期、田植方式とともに鹿角製スリザサラによる囃し田が伝えられた。鹿角が手に入りにくくなったり、鹿角の意味が忘れられると、木製品による代用も行われた。やがて、漢神信仰の伝来とともに馬骨製のスリザサラが用いられた。しかし、これも禁令等でなくなり、木製のもののみが残ることとなった。（竹製のササラゴも案外早くからあったかも知れない。）やがて、この楽器は囃し田以外にも、中世から近世にかけて多くの用途に用いられるようになった。現在はほとんど衰退し、わずかに民俗芸能にもちいられるのみとなり、その名も忘れかけられるようになったのである、と考える。

刻骨、鋸歯状木製品、そしてスリザサラに関して、さまざまな分野の文献に目を通し、民俗芸能もいくつか見、自作も試みて核心に迫ろうと努力し、以上のような結論に至った。まだまだ不明な点も多々あるが、鋸歯状木製品や刻骨の出土例が増えていき、その用途が解明され、また、スリザサラの系譜が解明されていくことを期待する。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、三重県埋蔵文化財センターの穂積裕昌氏に未発表資料のデータの提供をいただきました。ここに謹んで感謝いたします。

参考文献

- 文献1 佐賀県牛津町教育委員会 1995『生立ヶ里遺跡出土木製品図録編』『牛津町文化財調査報告書第7集』
- 文献2 (財)東大阪市文化財協会 1990『鬼虎川遺跡第1～3次発掘調査報告』
- 文献3 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『川合遺跡 遺物編3』『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第48集』
- 文献4 奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』『奈良国立文化財研究所学報第54冊』
- 文献5 瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 文献6 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『三ツ寺Ⅰ遺跡(木器編) 古墳時代居館の調査』
- 文献7 滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1977『久野部遺跡発掘調査報告書―七ノ坪地区―』
- 文献8 奈良国立文化財研究所 1984『木器集成図録 近畿古代編』『奈良国立文化財研究所史料第27冊』
- 文献9 平安京調査会 1975『平安京跡発掘調査報告―左京四条一坊―』
- 文献10 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』『奈良国立文化財研究所史料第36冊』
- 文献11 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日遺跡Ⅲ』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集』
- 文献12 奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告X 古墳時代Ⅰ』『奈良国立文化財研究所学報第39冊』
- 文献13 埋蔵文化財天理教調査団 1995『布留遺跡三島(里中)地区発掘調査報告書』
- 文献14 湖西線関係遺跡発掘調査団 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 文献15 九州歴史資料館 1980『大宰府史跡 昭和五十四年度発掘調査概報』
- 文献16 上市町教育委員会 1984『北陸自動車道―上市町木製品・総括編』
- 文献17 大阪府教育委員会 1993『志紀遺跡発掘調査概要Ⅲ』
- 文献18 奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告XⅠ 本文』『奈良国立文化財研究所学報第40冊』
- 文献19 奈良国立文化財研究所 1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』『奈良国立文化財研究所学報第44冊』
- 文献20 向日市教育委員会 1984『向日市埋蔵文化財調査報告書第13集』
- 文献21 藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会 1981『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書―奈良・平安時代編― 志太郡衙跡(御子ヶ谷遺跡・秋谷遺跡)』
- 文献22 富山県教育委員会 1972『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報』
- 文献23 熊本県教育委員会 1978『高橋南貝塚』『熊本県文化財調査報告第28集』
- 文献24 福岡県教育委員会 1978『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)』『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第八集』
- 文献25 立山町教育委員会 1987『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概報』『立山町文化財報告書第3冊』
- 文献26 勝田邦夫 1986『若江遺跡出土の木製品』『東大阪市文化財協会ニュース』2-1 (財)東大阪市文化財協会
- 文献27 九州歴史資料館 1981『大宰府史跡 昭和五五年度発掘調査概報』
- 文献28 研修道場用地発掘調査団 1983『研修道場用地発掘調査報告書 鶴岡八幡宮境内の中世遺跡発掘調査報告書』
- 文献29 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1998『荻市遺跡(一般国道159号荻市歩道設置に係る発掘調査報告書)』
- 文献30 森 貞次郎・乙益重隆 1987『渾脱の舞―清戸迫横穴第七七号墓出土の鋸歯状木器を中心として―』『東アジアの考古と歴史』下
- 文献31 佐賀新聞 1995 1月17日「木・竹製は『ササラ』国内最古の楽器か」
- 文献32 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』22
- 文献33 第2 阪和国道内遺跡調査会 1970『池上・四ツ池』
- 文献34 豊橋市教育委員会 1963『瓜郷』
- 文献35 更埴市教育委員会 1969『生仁―更埴市生仁遺跡第1次(昭和43年度)緊急発掘調査報告』
- 文献36 本浦遺跡群調査委員会 1990『白浜遺跡発掘調査報告』
- 文献37 佐賀新聞1994 12月25日「『新さが歴史発見』50・スリザサラの原形か」
- 文献38 松山友子 1989「館収蔵の刻骨について」『黎明館調査研究報告』3
- 文献39 末永雅雄 1935『本山考古室要録』
- 文献40 山陽新聞 1989 8月23日「弥生後期の刻骨」
- 文献41 愛知県教育委員会 1965『豊川用水路関係遺跡調査報告』
- 文献42 八尋 実 1983『詫田西分貝塚』『千代田町文化財調査報告』2
- 文献43 南知多町教育委員会 1979『日間賀島の古墳』
- 文献44 名古屋市博物館 1988『考古学の風景』
- 文献45 紅村 弘 1963『東海の先史遺跡 総括編』名鉄(株)
- 文献46 西尾市史編纂委員会 1973『西尾市史1 自然環境 原始古代』
- 文献47 山下勝年 1989『神明社貝塚』南知多町教育委員会
- 文献48 山陽新聞 1993 5月26日「弥生・古墳期の刻骨出土」

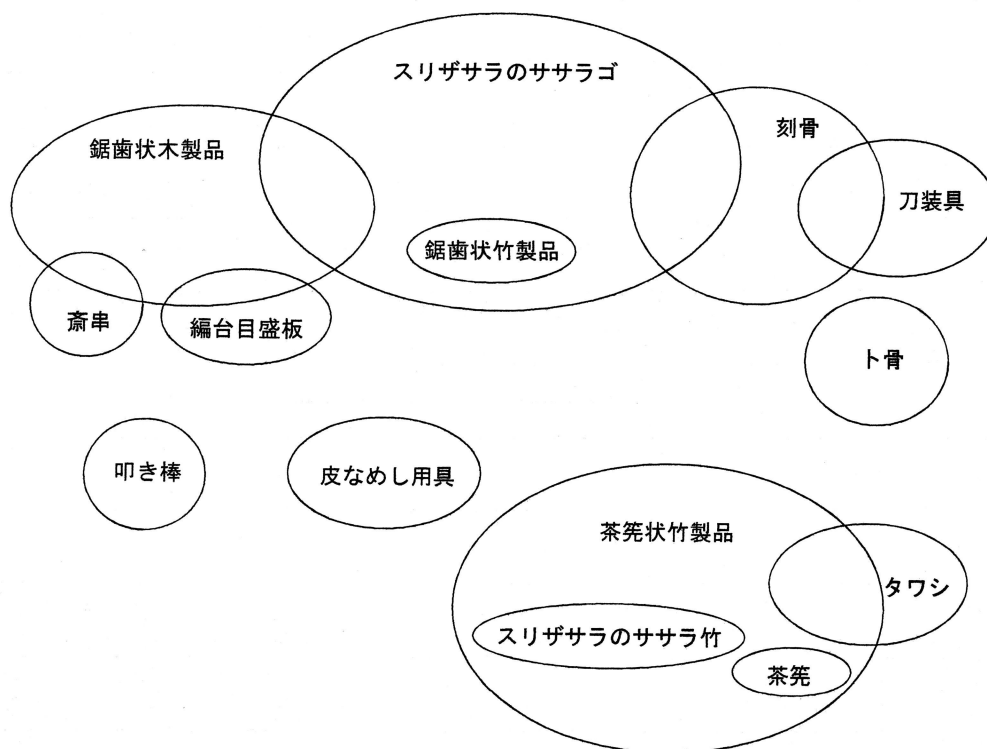
- 文献49 山陽新聞 1987 7月19日「刻骨とト骨セット出土」
- 文献50 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1986『宮前川遺跡』『埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』
- 文献51 田原本町教育委員会 1986『昭和60年度唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』4
- 文献52 千葉県文化財センター 1985『千葉市村田服部遺跡』
- 文献53 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『川合遺跡 静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査の概要1986』
- 文献54 山田光洋 1998『楽器の考古学』『ものが語る歴史シリーズ』1 同成社
- 文献55 名古屋大学文学部 1993『法海寺遺跡Ⅱ』『知多市文化財資料第31集』知多市教育委員会
- 文献56 千葉県文化財センター 1981『千葉市矢作貝塚』
- 文献57 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987『石本遺跡』『京都府遺跡調査報告書第8冊』
- 文献58 八雲立つ風土記の丘資料館 1977『古代の出雲 生と死のまつり』
- 文献59 木村幾多郎 1987「刻骨」『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 文献60 金子浩昌 1985「豊田本郷遺跡出土のウマ橈骨について」『豊田本郷 主要地方道平塚・伊勢原線新設工事に伴う発掘調査報告書』
- 文献61 福岡県教育委員会 1987『小郡市所在井上薬師堂遺跡の調査』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』10
- 文献62 小林行雄他 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16
- 文献63 文化公報部・文化財管理局 1976『馬山外洞城山貝塚発掘調査報告』
- 文献64 金 廷鶴 1967「熊川貝塚研究」『亜細亜研究』10-4
- 文献65 徐 賢珠 1996「南海岸地域原三国時代貝塚の時期区分と起源問題—出土遺物を中心にして—」『湖南考古学報』4 輯 湖南考古学会
- 文献66 金 両基監修 1988『図説 韓国の歴史』河出書房新社
- 文献67 沈 奉謹 1981『金海府院洞遺跡』『古蹟調査報告』5
- 文献68 崔 盛洛 1987『海南郡谷里貝塚Ⅰ』木浦大学博物館
- 文献69 国立中央博物館 1976『朝島貝塚』『国立博物館古蹟調査報告』9
- 文献70 木川正夫 1990「刻目のある木製品について—ササラの起源と変遷—」『民具研究』87
- 文献71 氷野正好 1987「楽器の世界」『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 文献72 増田 修・横山妙子 1997「『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41別冊付録 市民の古代研究会・関東
- 文献73 増田 修 1997「解説『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41別冊付録 市民の古代研究会・関東
- 文献74 須藤 功 1970『西浦のまつり』未来社
- 文献75 鹿児島県歴史資料センター黎明館 1983『鹿児島県の歴史と文化 部門別展示図録』
- 文献76 小野重朗 1985「基本的脱穀民具」『民具の伝承—有形文化財の系譜(下)—』『常民文化叢書』11 慶友社
- 文献77 宋 兆麟他 1983『中国原始社会史』文物出版社
- 文献78 鄂倫春族簡史編写組 1981『鄂倫春族簡史』内蒙古人民出版社
- 文献79 秋浦主編 1984『鄂倫春族』文物出版社
- 文献80 秋浦他 1962『鄂温克人的原始社会形態』中華書局出版
- 文献81 ハンス・ザックス詩 ヨースト・アマン版 1970『西洋職人づくし』岩崎美術社
- 文献82 新田栄治 1977「日本出土ト骨への視角」『古代文化』29-12
- 文献83 久枝秀夫 1969「大田植の楽器—サンバイ竹—」『田唄研究』12
- 文献84 牛尾三千夫「大田植の楽器」『民具マンスリー』
- 文献85 吉田智一 1977『獅子の平野』『フォークロアの眼』5 国書刊行会
- 文献86 佐原 真 1987『大系日本の歴史』1 小学館
- 文献87 小林行雄 1959「鹿」『図解考古学辞典』東京創元社
- 文献88 千葉徳爾 1975『狩猟伝承』『ものと人間の文化史』14 法政大学出版局
- 文献89 水野正好 1978「まじないの考古学・事始」『どるめん』18
- 文献90 ダイアグラムグループ編 1992『楽器』マール社
- 文献91 長尾一雄 1988「ささら」『平凡社世界大百科事典』11 平凡社
- 文献92 吉川英史監修 小島美子・藤井知昭・宮崎まゆみ編 1992『図説 日本の楽器』東京書籍
- 文献93 吉川英史 1981「ささら」『平凡社世界大百科事典』12 平凡社
- 文献94 阿部正信編 1909『駿国雑誌』7 吉見書店
- 文献95 山崎和文 1992「佐賀の民俗楽器」『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査研究書第17集』

型式	特徴	年代	出土点数
I 類	無整形に近い角柱材に刻目	弥生中期前葉～13C	計12
I a 類	角柱材の稜に刻目する	弥生中期前葉～8C中葉	計7
I a	刻目が1列	弥生中期前葉～8C中葉	5
I a'	刻目が2列以上	弥生中期中葉～6C前半	2
I b 類	角柱材の面に刻目する	7C前葉～13C	計5
I b	刻目が1列	7C前葉～13C	5
I b'	刻目が2列以上	—	未確認
II 類	断面楕円か長八角形の材	弥生中期前葉～中世	計20
II a 類	断面短軸方向に刻目する	弥生中期前葉～中世	計20
II a	刻目が片側（1列）	弥生中期前葉～中世	12
II a'	刻目が両側（2列）	古墳中期～8C後半	8
II b 類	断面長軸方向に刻目する	—	未確認
II b	刻目が片側（1列）	—	未確認
II b'	刻目が両側（2列）	—	未確認
III 類	板状材から加工する	8C前葉～16C後半	計24
III a 類	側方に刻目する	8C前葉～16C後半	計23
III a	刻目が片側（1列）	8C前葉～16C後半	19
III a'	刻目が両側（2列）	8C後半～10C前半	4
III b 類	平面に刻目する	中世	計1
III b	刻目が片側（1列）	中世	1
III b'	刻目が両側（2列）	—	未確認
IV 類	円柱状材に刻目する	奈良～中世～現代	計2
IV a 類	刻線が材を全周しない	奈良（～現代）	計1
IV a	刻目が1列	奈良（～現代）	1
IV a'	刻目が2列以上	—	未確認
IV b 類	刻線が材を全周する	中世（～現代）	計1
IV b	リング（輪）状に刻目	～現代	民俗例
IV b'	螺旋状に刻目	中世（～現代）	1
V 類	鋸齒状竹製品	～現代	民俗例
V a 類	竹材に穴の列ができる	～現代	民俗例
V a	刻目が1列	～現代	民俗例
V a'	刻目が2列以上	—	未確認
V b 類	縦方向に溝ができる	～現代	民俗例
V b	刻目が2列（一組）	～現代	民俗例
V b'	刻目が二組以上	～現代	民俗例

第1表 出土鋸齒状木製品（I～IV）・鋸齒状竹製品（V）型式分類表（文献70を大幅に改変）

型式	特徴	年代（韓国は各年代観）	点数	国別
Ⅰ類	鹿角を素材 (Ⅰa～Ⅰc類に分類不能の破片はⅠ類とする)	弥生後期～古墳後期	8	日本
		BC 2 C～AD 4 C (報告書)	2	韓国
		AD 3 C～5 C (申敬澈氏)		
		AD 1 C～4 C (崔盛洛氏)		
Ⅰa類	枝角を残すか、枝角を利用する	弥生後期	1 1	日本
		BC 1 C～AD 3 C (報告書) AD 3 C～5 C (申氏)	2	韓国
Ⅰb類	角幹部を利用し、棒状に加工する	弥生末期～古墳後期	1 2	日本
		BC 1 C～AD 3 C (報告書) AD 3 C～5 C (申氏)	9	韓国
		AD 3 C～4 C (崔氏)		
Ⅰc類	刀装具	古墳	1	日本
		BC 2 C～AD 4 C (報告書) AD 3 C～4 C (申氏)	3	韓国
		AD 1 C～2 C (崔氏)		
Ⅱ類	ウマ・ウシ長管骨を素材	古墳?～7 C～8 C	3	日本
		～AD 2 C (報告書) BC 2 C～AD 5 C (申氏)	1	韓国

第2表 刻骨型式分類表（文献59を一部改変）



第1図 スリザサラに関する概念図

世紀 BC	時代 縄文 弥生	形態 晩期 前期	鋸齒状木製品					竹製品					日本の刻骨					韓国の刻骨					世紀 AD
			I a	I a'	I b	II a	II a'	III a	III a'	III b	IV a 絵画・民俗資料を含む	IV b	IV b'	V	I a	I a'	I b	I c	I a	I a'	I b	I c	
3	縄文	前期																					3
2	弥生	前期																					2
1		中期																					1
1		後期																					1
2																							2
3																							3
4	古墳	前期																					4
5		中期																					5
6		後期																					6
7																							7
8	奈良																						8
9	平安	前期																					9
10		中期																					10
11		後期																					11
12																							12
13	鎌倉																						13
14	室町	南北朝																					14
15																							15
16		戦国																					16
17	安土桃山 江戸	前期																					17
18		中期																					18
19		後期																					19
20	明治 大正 昭和																						20
出土点数			5	2	5	12	8	19	4	1	1	1	1	2	11	11	12	1	2	9	3	1	1

第3表 鋸齒状木製品、鋸齒状竹製品、茶筌状竹製品、及び刻骨の時期的分布表

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅厚	縦横範囲	空白部高	縦横数	刻線密度	年代	備考	所在地	文献
1	生立ヶ里遺跡	Ia?	?	26	3×3	13.5	0.3	122	25?	弥生中期前半 (BC1C)	SK29 (隅丸長方形土坑) より出土	佐賀県小城市津町大字乙柳	1
2	鬼虎川遺跡	Ia	カン	46.9	3.4×3.2	18.0+α	?	21.2	8+α	弥生 II～III	第3トレンチの溝出土	大府市東大府市弥生町・西石切町2丁目・宝町	2
3	鬼虎川遺跡	Ia	カン	25.7	3.0×3.2	7.2+α	?	16.8	4+α	弥生 II～III	第3トレンチの溝出土	大府市東大府市弥生町・西石切町2丁目・宝町	2
4	川合遺跡	Ia?	?	55.6	3.5×2.8	15.0	5.7	34.8	13	古墳中期 (後半)	第5遺構面SR11401上層	静岡県静岡市川合973-1	3
5	平城京左京三条二坊八坪	Ia	スギ	23.7	1.0×1.0	17.8	1.5	4.4	25	729～745	6AF1-U区SD5100壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
6	瓜生堂遺跡	Ia?	カン類割り材	56.6	5.0×2.9	22.5	0.8	32.5	16～7	弥生中期中頃 (III～IV)	縄痕あり 41Q～P20区溝SD136出土	大府市東大府市若江西新町1丁目	5
7	三ツ寺1遺跡	Ia?	カヤ・分割材	31.9+α	2.8×2.3	10.5	8.5	12.6	9	古墳 (5C後半～6C前半)		群馬県群馬町大字三ツ寺字藤塚通上572番地	6
8	久野部遺跡	Ib	スギ	43.5	1.8×2.1	17.4	?	12.5	3+α	7C前半 (～8C)	SD10	滋賀県野洲郡野洲町久野部字七ノ坪	7
9	上田部遺跡	Ib	ヒノキ	40.5+α	2.9×2.9	13.8	6.8	19.6	12?	735年頃	水田跡	大阪府高槻市槇園町510番地	8
10	平城京左京三条二坊八坪	Ib	スギ	9.5+α	0.9×0.7	3.4+α	0.8	5.4	6+α	729～745	6AF1-U区SD5100壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
11	平城宮跡	Ib	ヒノキ	16.3+α	1.4×1.4	15.5+α	?	?	7+α	8C後半～9C前半	6ALF-LorJ・KorP区SG5800B東院園地	奈良県奈良市	8
12	平安京左京四条一坊	Ib?	?	19.3	1.8×1.8	9.3	4.2	5.7	8?	鎌倉? (12～13C)	ND64-3-J-15 SD01茶褐色泥砂	京都府京都市	9
13	鬼虎川遺跡	IIa	イヌガヤ	10.1+α	2.5×0.8	8.9+α	1.2	?	4+α	弥生 II～IV	7次調査69NW区第130a層	大阪府東大府市弥生町・西石切町5丁目	10
14	朝日遺跡	IIa?	?	26.4	2.4×0.8	8.8	4.8	12.8	3	弥生 II～III (BC1C)	61A区 SD02	愛知県西春日井郡清洲町	11
15	四ツ池遺跡	IIa	ヒノキ	21.2+α	3.4×0.7	4.4	0.8	16.0	3	古墳4～5C	I151区N溝	大阪府堺市凉寺船尾町付近	10
16	平城宮下層遺跡	IIa	ヒノキ	33.7	3.1×1.3	8.2	3.6	22.4	9	古墳5C前半	6AAW-BA08区河川SD6030上層II砂出土	奈良県奈良市佐紀町	12
17	布留遺跡	IIa	ヒノキ	16.1+α	1.7×0.7	6.3	0.6	9.2	4	古墳5C中葉～6C前半	三島 (里中) 地区FL203区旧流路出土	奈良県大津市三島町	13
18	三ツ寺1遺跡	IIa	モミ	26.3+α	2.3×1.0	13.5	1.4	11.3	9	古墳 (5C後半～6C前半)		群馬県群馬町大字三ツ寺字藤塚通上572番地	6
19	湖西線関係 (滋賀里) 遺跡	IIa?	?	23.0	1.1×0.4	11.5	0.8	10.8	8	古墳 (6C後半)	VA区1号住居跡 琴柱と伴出	滋賀県大津市滋賀里	14
20	大宰府史跡	IIa?	?	13.0	3.6×0.8	10.0+α	?	6.4	14+α	7C後半～8C初頭	麻食土層出土	福岡県筑紫郡太宰府町	15
21	平城宮跡	IIa	ヤナギ属?	12.1+α	2.0×0.9	10.5+α	?	?	15+α	8C前半 (葉)	6ALG-C区SD5785左京二条二坊条間路	奈良県奈良市	8
22	平城宮跡	IIa	アスナロ?	12.3+α	1.9×0.9	7.4+α	2.0	?	6+α	8C (後半)	6AAC-N・H区SD2700内裏外郭東大溝	奈良県奈良市	8
23	平城宮跡	IIa	ヒノキ	13.1+α	3.4×0.6	10.0+α	?	?	18+α	8C (後半)	6AAI-C区SD3410東方大溝	奈良県奈良市	8
24	江上B遺跡	IIa?	?	5.0+α	1.4×0.6	3.6+α	1.0	?	6+α	中世	SD037	富山県上市町	16
25	六太A遺跡	IIa?	?	11.5+α	2.0×0.8	5.5	1.6	4.1	9	古墳中期	H-K11 SD111層下部 未報告	三重県津市大里窪田町	-
26	志紀遺跡	IIa?	?	37.9	3.5×1.8	20.0	0.8	16.8	26	古墳中期	第4遺構面 (水田遺構) 上層 (植物遺体層)	大阪府八尾市志紀町西1丁目	17
27	平城京左京二条二坊五坪	IIa?	アカガシ連属	10.8+α	3.2×1.1	9.0+α	1.1	0.7	15+α	729～745	6AFF-J・K区SD5021東二坊坊間路西側溝上層	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
28	平城京左京二条二坊五坪	IIa?	スダジイ	5.7+α	1.2×0.2	4.8+α	0.7	0.2	11+α	729～745	6AF1-U区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
29	平城宮跡	IIa?	シギミ	39.8	3.8×2.1	26.1	0.6	13.0	48	8C	6ACU-E・H区SD1250南西外壕	奈良県奈良市	8
30	平城宮跡	IIa?	ヒノキ	14.4+α	1.9×1.1	13.0+α	0.6	?	15+α	753年頃	6ABR-H区SB7802第1次大極殿	奈良県奈良市	18
31	平城宮跡	IIa?	カエデ属	3.9+α	2.4×0.6	3.2+α	0.5	?	8+α	753年頃	6ABR-H区SB7802第1次大極殿	奈良県奈良市	18
32	平城宮跡	IIa?	ツツギ	17.8+α	2.4×0.8	16.4+α	?	?	18+α	8C後半	6AAI-M・N・O区SD4951入隅部東面外壕	奈良県奈良市	8

第4表-1 鋸齒状木製品出土地名表その1

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅厚	刻線範囲	空白部長	刻線数	刻線密度	年代	備考	所在地	文献
33	平城京左京三条二坊六坪	IIa ?	?	15.8+ α	2.0X0.5	14.0+ α	?	7+ α	2	713年頃 (8C前半)	6AFI-9区SD1525	奈良県奈良市三条大路1丁目	19
34	平城京左京三条二坊六坪	IIa ?	?	14.9+ α	1.8X0.7	8.8+ α	2.3 ?	6+ α	1.47	713年頃 (8C前半)	6AFI-9区SD1525	奈良県奈良市三条大路1丁目	19
35	平城京左京三条二坊六坪	IIa ヒノキ	?	15.9+ α	1.4X1.4	14.4+ α	1.5 ?	7+ α	2.06	713年頃 (8C前半)	6AFI-9区SD1525	奈良県奈良市三条大路1丁目	19
36	平城京左京三条二坊五坪	IIa スギ	?	7.2+ α	1.9X0.7	6.4+ α	0.2 0.6	9+ α	0.71	729~745	6AFI-UI区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
37	平城京左京三条二坊五坪	IIa ?	?	17.1+ α	1.4X0.4	14.0+ α	2.6 0.5	12+ α	1.17	729~745	6AFI-UI区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
38	平城京左京三条二坊五坪	IIa ?	?	13.1	0.9X0.4	4.4	1.2 7.6	10	0.44	729~745	6AFI-UI区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
39	平城京左京三条二坊五坪	IIa ?	?	22.5+ α	3.3X0.8	13.2+ α	6.5 2.7	14+ α	0.94	729~745	6AFI-UI区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
40	平城京左京三条二坊五坪	IIa ?	?	17.1	2.7X0.5	14.4	1.6 1.0	8	1.8	745~750頃	6AFI-J区SD5240B二条大路北側遺構出土	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
41	長岡京左京南一条三坊三町	IIa ?	?	12.4+ α	2.4X0.6	10.4+ α	2.0 ?	7+ α	1.49	8C末 ?	7ANEJS-2地区 溝SD8903下層 斎車 ?	京都府向日市	20
42	御子ヶ谷遺跡	IIa ?	?	21.6+ α	3.5X0.6	9.0+ α	?	6+ α	0.88	奈良・平安	下記と同一個体とみられる	静岡県藤枝市大字瀬古御子ヶ谷67番地	21
43	御子ヶ谷遺跡	IIa ?	?	9.3+ α	3.5X0.6	9.0+ α	?	10+ α	0.9	奈良・平安	上記と同一個体とみられる	静岡県藤枝市大字瀬古御子ヶ谷67番地	21
44	御子ヶ谷遺跡	IIa ?	?	36.3+ α	3.8X0.4	8.8+ α	?	4+ α	2.2	奈良・平安	SA013	富山県下新川郡入善町	22
45	じょうべのま遺跡	IIa ?	?	26.2+ α	2.6X0.3	13.8+ α	?	8.0	16?	9C初~10C前半	軍地区遺物倉倉層出土	滋賀県高島郡高島町鶴	8
46	鶴遺跡	IIa スギ	?	47.5	3.5X1.2	30.5	0.3 16.5	30+ α	1.02	9C後半~10C前半	B-5-9出土	熊本県熊本高橋町上高橋	23
47	高橋南貝塚	IIa アカガシ垂属	?	38.3+ α	6.2X1.8	21.0	12.3 ?	8+ α	2.63	12C末~13C	ND64-3-J-15 SD03茶褐色泥砂	京都府京都市	9
48	平安京左京四条一坊	IIa ?	?	13.8	2.1X0.8	10.8	0.8 ?	5+ α	2.16	鎌倉 ? (12~13C)	KNF9区木器溜り	福岡県筑紫郡太宰府町	24
49	徳富川南条坊遺跡	IIa ?	?	14.2	1.5X0.4	11.6	1.4 1.2	6	1.93	鎌倉 ?	「六十七」という墨書	雷山県立山町辻字西吉原	25
50	辻遺跡	IIa ?	?	28.0	1.8X0.7	16.6	1.5 9.8	25	0.66	中世	SK1605-B出土	福岡県筑紫郡太宰府町	26
51	若江遺跡	IIa ?	?	11.2+ α	1.4X0.3	9.2+ α	1.4 ?	7+ α	1.31	16C後半			27
52	大宰府史跡	IIa ?	?	16.0	2.2X0.6	14.0	1.2 1.4	9	1.56	奈良・平安 ?			
53	平城宮跡	IIa ?	?	19.5	1.8X0.3	2.0+ α	?	5+ α	0.4	756年頃	6AAC-V区SD3035宮内省造酒司の溝 斎車 ?	奈良県奈良市	8
54	姫谷遺跡	IIa ?	?	17.1+ α	2.7X0.5	4.6	0.5 10.0	20	0.45		旧河川出土 斎車 ? 下記と同一個体の可能性	兵庫県城崎郡日高町野字姫谷	8
55	姫谷遺跡	IIa ?	?	22.0+ α	2.1X0.5	13.8+ α	1.0 11.2	8	0.58	9C前半	旧河川出土 斎車 ? 上記と同一個体の可能性	兵庫県城崎郡日高町野字姫谷	8
56	鶴岡八幡宮研究修遺跡用地	IIb ?	?	17.0+ α	0.5X1.4	7.2	1.8 7.9	13	0.55	中世	第1清瀬土中	神奈川県鎌倉市	28
57	平城京左京二条二坊五坪	IVa ウツギ	?	4.8+ α	2.8X0.3	3.3+ α	0.7 1.0	5+ α	0.66	729~745	6AFI-UI区SD5300壕状遺構	奈良県奈良市二条大路南1丁目	4
58	鶴岡八幡宮研究修遺跡用地	IVb ?	?	10.0+ α	1.6X1.3	9.8+ α	0.2 ?	18+ α	0.54	中世	第1清瀬土中 雑遊状	神奈川県鎌倉市	28
59	秋市遺跡	- アカガシ垂属	?	82.6	5.0X1.2	44.9	2.7 36.4	9	4.99	弥生後期後半	O-4区大溝3層ビーント質粘質土	石川県羽咋郡志保町秋市地内	29
60	清戸始構穴	- ヤマザクラ	?	99.2	5.2X4.8	87.0	6.0 8.0	17	5.12	7C	第77号墓出土	福島県双葉郡双葉町大字新山字清戸始	30

第4表一2 鋸齒状木製品出土地名表その2

No.	遺跡名	材質	全長	幅厚	刻線範囲	空白部長	年代	備考	所在地	文献
1	生立ヶ里遺跡	竹	11(+15)	2.5X2.5	- 7.5	- 7.5	弥生中期前半(BC1C)	鋸齒状木製品と30m離れて出土 SE94中の木白と伴出	佐賀県小城市津町大字乙柳	31
2	袴塚遺跡	竹	14.3	3.0X3.0	8.3	- 6.0	奈良・平安		兵庫県出石町	32

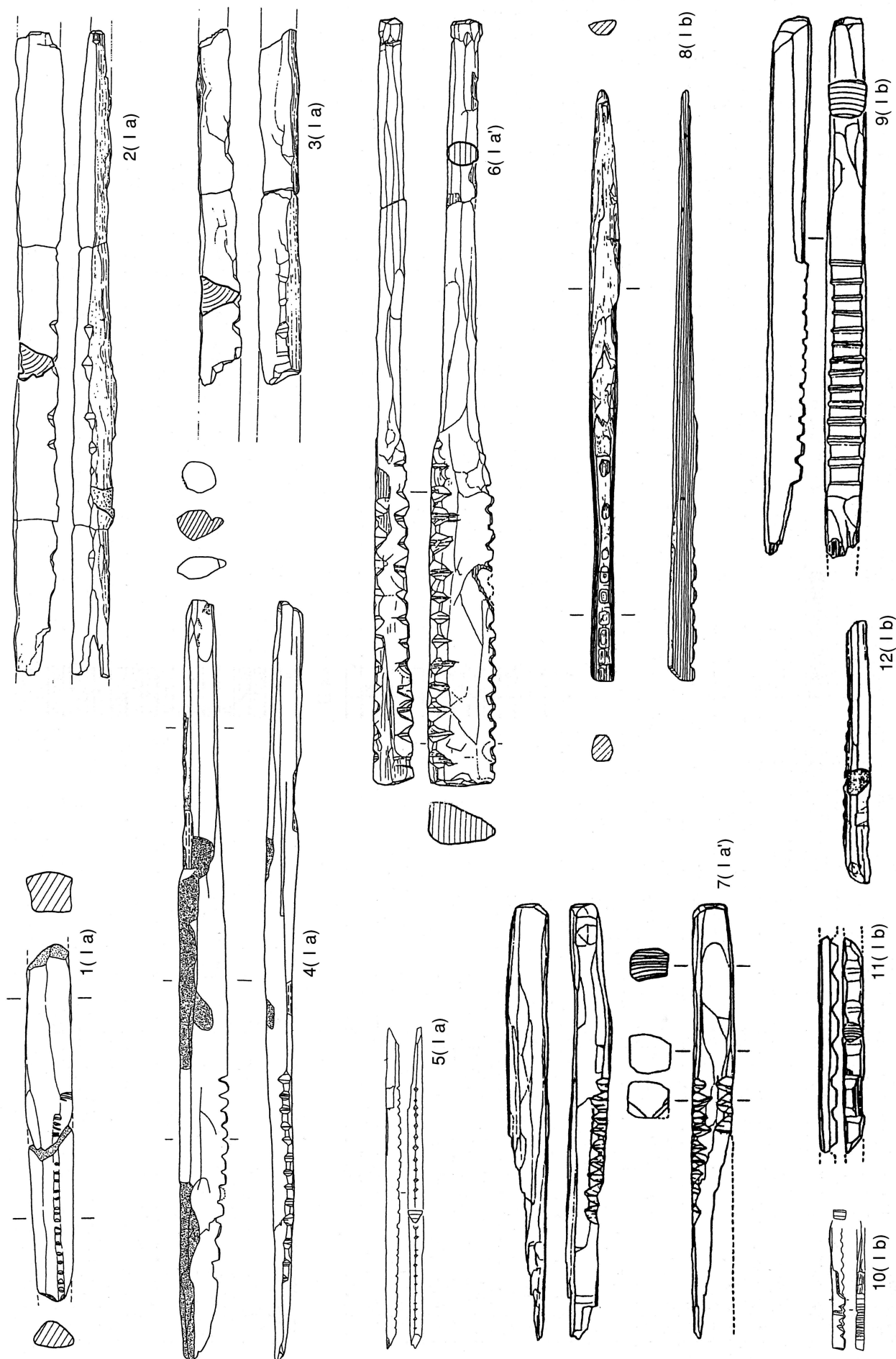
第5表 茶筌状竹製品出土地名表

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅厚	刻線範囲	空白部長さ	刻線数	刻線密度	磨減痕有無	年代	備考	所在地	文献
1	池上遺跡	Ia	シカ・角	21.0	1.8	6.3	0.8 7.4	15	0.42	?	弥生	各々刻目のない鹿角と2本1組で出土	大阪府和泉市上町	33
2	瓜敷遺跡	Ia	シカ・角	14.8	1.6	6.5	4.5 4.0	21	0.31	○	弥生後期長式(1C後半)	各々刻目のない鹿角と2本1組で出土	愛知県豊橋市瓜敷町	34
3	瓜敷遺跡	Ia	シカ・角	10.1+α	1.1	6.5+α	3.7 ?	19+α	0.34	○	弥生後期長式(1C後半)	各々刻目のない鹿角と2本1組で出土	愛知県豊橋市瓜敷町	34
4	生仁遺跡	Ia	シカ・角	27.1+α	1.7	3.8	4.5 18.0	12	0.32	○	弥生後期相清水式(2C)	Y7号住居跡 卜骨(シカ)出土	尾野黒更塚市生仁	35
5	白坂遺跡	Ia	シカ・角	14.7+α	2.0	4.9	4.1 5.6	16	0.31	○	弥生後期	H1 2黒褐色泥砂 銅鐸上層	三重県桑名市浦町白浜	36
6	千住遺跡	Ia	シカ・角	?	?	?	?	27	?	?	弥生後期	佐賀屋佐賀市	佐賀屋佐賀市	37
7	黎明庵瓦葺品	Ia	シカ・角	19.6	1.6×1.3	8.7	2.1 9.0	31	0.28	○	弥生後期?	不明	不明	38
8	国府遺跡	Ia	シカ・角	25.5	1.9×1.9	2.0	14.7 8.1	8	0.25	?	弥生後期?	2カ所に刻線あり	大阪府藤井寺市国府	39
9	吉備東山遺跡	Ia	シカ・角	18.0	1.3 1.9	10.0	8.0 ?	26	0.38	○	弥生後期?		岡山県岡山市八木	40
10	石山3号貝塚	Ia	シカ・角	9.0	2.5	5.2	1.7 1.9	14	0.37	○	弥生後期	表土層 炭痕あり 表皮に焼痕が残る	愛知県宝飯郡小坂井町小坂井字久山	41
11	純田西分貝塚	Ia	シカ・角	4.9+α	1.8	1.3+α	3.5 ?	5+α	0.26	○	弥生後期?	袋の口? 約四分の一程度の残欠	佐賀屋黒崎郡千代田町	42
12	新居成貝塚	I	シカ・角	3.4+α	1.7×0.4	3.4+α	?	10+α	0.34	?	弥生		愛知県知多郡南知多町大字日間賀島	43
13	西玉賀貝塚	I	シカ・角	11.7+α	2.0×1.8	5.7+α	6.0 ?	22+α	0.26	?	弥生		愛知県名古屋市中区北區日田町	44
14	高蔵貝塚	I	シカ・角	4.2+α	2.7	1.0+α	3.2 ?	5+α	0.2	?	弥生後期初頭?		愛知県名古屋市中区熱田区外土居町~沢上町	44
15	高蔵貝塚	I	シカ・角	?	?	?	?	15	?	?	弥生後期初頭?		愛知県名古屋市中区熱田区外土居町~沢上町	45
16	八反田遺跡	I	シカ・角	7.0	?	5.0+α	2.0 ?	16+α	0.31	?	弥生後期後半次山式(3C)	土坑	愛知県名古屋市中区熱田区外土居町~沢上町	46
17	神明社貝塚	I	シカ・角	6.1+α	2.0×1.1	6.1+α	?	21+α	0.29	?	不明(古墳?)	工事排出土中 卜骨と思われる鹿の肩胛骨共出	愛知県知多郡南知多町大字篠島字神戸101番地	47
18	神明社貝塚	Ib	シカ・角	20.5+α	2.6×2.7	8.0	3.6 9.8	26	0.31	?	不明(古墳?)	工事排出土中 卜骨と思われる鹿の肩胛骨共出	愛知県知多郡南知多町大字篠島字神戸101番地	47
19	荒野貝塚	Ib	シカ・角	?	?	?	?	?	?	?	弥生	未報告	佐賀屋	-
20	用本遺跡	Ib	シカ・角	23.0	2.5	8.6	6.0 8.5	30	0.29	○	弥生末期~古墳初頭(3C後半~4C初頭)	貝層の底	岡山県土居町長兵衛	48
21	津島江遺跡	Ib	シカ・角	30.0	3.2	8.3	10.8 11.8	22	0.38	○	弥生末期~古墳初頭(3C末~4C初)	登穴住居跡より卜骨とセット	岡山県岡山市津島東一丁目	49
22	津島江遺跡	Ib	シカ・角	31.4	2.9	10.0	9.8 12.4	30	0.33	○	弥生末期~古墳初頭(3C末~4C初)	登穴住居跡より卜骨とセット	岡山県岡山市津島東一丁目	49
23	津島江遺跡	Ib	シカ・角	21.0+α	3.4	8.2+α	1.2 12.4	31+α	0.26	○	古墳初頭	西山地区C-1 4区	愛媛県松山市北斎院町	50
24	唐古・鎌遺跡	Ib	シカ・角	21.6	2.7×2.5	6.0	7.2 8.3	17	0.35	?	古墳前期	土坑(SK-103 第2 4次調査区) 基部端に焼成遺	奈良県磯城郡田原本町大字唐古・鎌	51
25	唐古・鎌遺跡	Ib	シカ・角	16.0	2.3	8.8	4.5 3.0	29	0.30	○	古墳前期~中期五領・和泉式	溝内 金属刃物加工	千葉県千葉市村田川原部	52
26	川谷遺跡	Ib	シカ・角	?	?	?	?	13+α	?	?	古墳中期	SR1101 (旧河)	静岡県岡崎市川谷973-1	53
27	恒武山ノ花遺跡	Ib	シカ・角	27.7	3.0×2.7	9.7	9.0 9.0	27	0.36	?	古墳	鎌岡京松本市	静岡県岡崎市川谷973-1	54
28	法海寺遺跡	I	シカ・角	22+α	1.7×0.7	22+α	?	8+α	0.28	?	古墳中期後半(5C後半)	第2層(貝層) 中	愛知県知多市八幡字井19番地	55
29	天寿寺遺跡	Ib	シカ・角	27.0	2.9	7.7	10.0 9.5	19	0.41	○	古墳後期高式(6C~7C)	住居跡内 金属刃物加工 床面直上 一端に穿孔	千葉県千葉市美作町	56
30	石本遺跡	Ib	シカ・角	25.5	3.0×2.7	15.2	5.4 4.9	44	0.35	○	古墳後期(6C後半~7C初)	大溝内 散骨伴出 祭祀的遺物多数出土	京都府京都市大宮区・石本	57
31	石本遺跡	I	シカ・角	60+α	?	?	?	?	?	?	古墳後期(6C後半~7C初)	大溝内 散骨伴出 祭祀的遺物多数出土	京都府京都市大宮区・石本	-
32	古浦山丘遺跡	Ic	シカ・角	?	?	?	?	19+α	?	X	古墳	刀装具	島根県八束郡能島町古浦	58
33	高蔵貝塚	II	ウマ・中手骨	22.9	2.5×3.2	7.8	5.7 9.5	25~6	0.31	○	弥生後期初頭?	金属刃物加工	愛知県名古屋市中区熱田区外土居町	59
34	井田本郷遺跡	II	ウマ・櫓骨	30.4	3.3	8.0	11.0 11.5	16	0.5	○	7~8世紀	大溝内 ウマ・イヌ遺存骨 鋸加工	神奈川県平塚市豊田本郷	60
35	井田本郷遺跡	II	ウマ・中足骨	19.5+α	3.1	11.6	6.9 ?	25	0.46	○	8世紀	空白部に浅い線刻あり 金属刃物加工 大溝内	福岡県八幡市大字井上	61
36	唐古・鎌遺跡	-	シカ・下顎骨	9.0	2.7	-	- -	17(壊)	-	○	弥生前期	腕空部に紐を通し垂下	奈良県磯城郡田原本町大字唐古・鎌	62

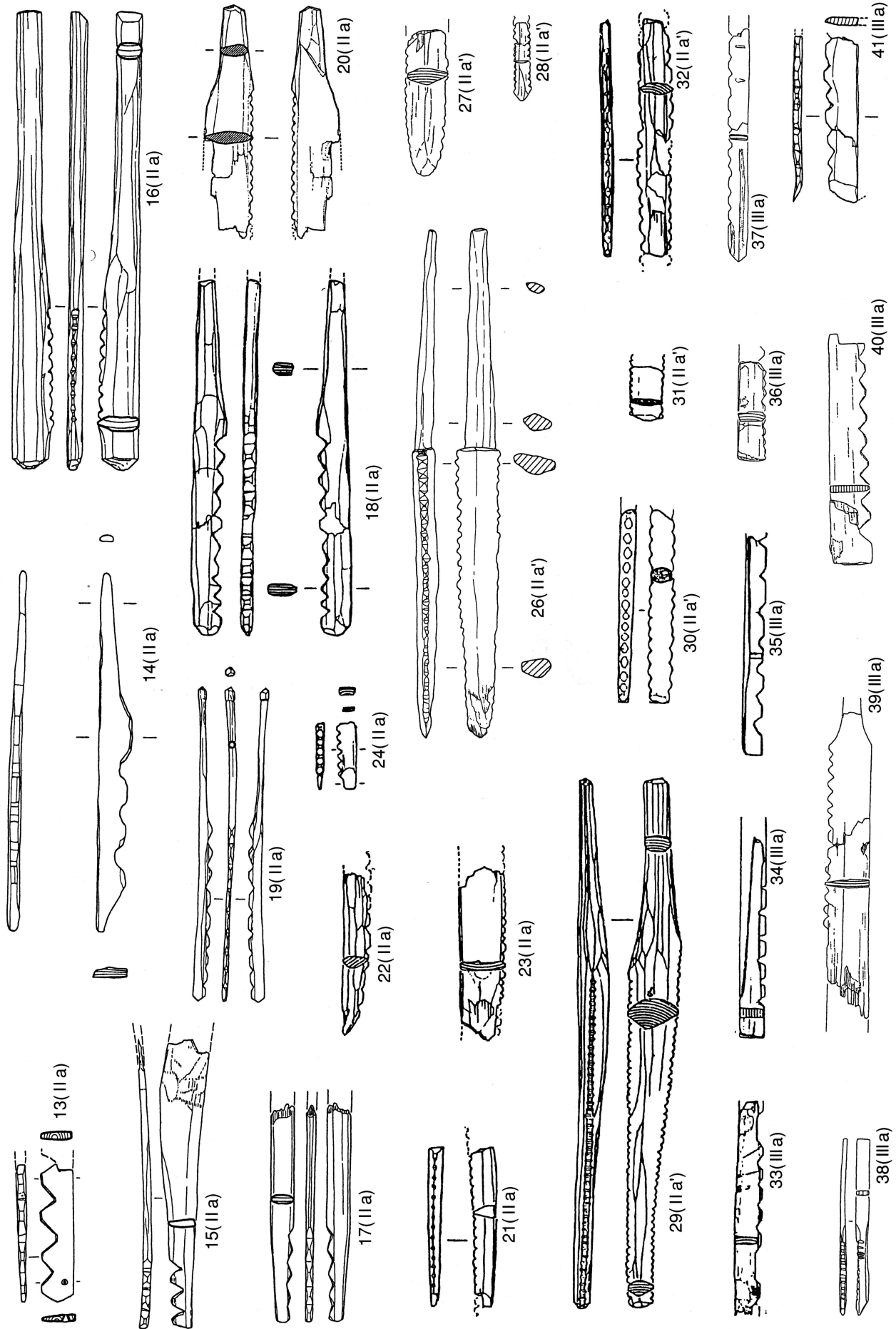
第6表 日本の刻骨出土地名表

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅厚	刻線範囲	空白部長さ	刻線数	刻線密度	磨減痕有無	年代	備考	所在地	文献
1	城山貝塚	Ia	シカ・角	7.9+α	1.4	4.7+α	?	3.3	15+α	0.31	BC1C~AD3C(AD3~4C)	北区貝塚	愛知県南知多郡原市外洞	63
2	龍川貝塚	Ia	シカ・角	20.0+α	2.0	9.0+α	?	31+α	0.29	○	AD1~2C(AD4~5C)	角枝	愛知県南知多郡市龍川洞林山	64
3	龍川貝塚	I	シカ・角	12.0+α	3.0+α	10.0+α	?	28+α	0.36	○	AD1~2C(AD4~5C)	未報告	愛知県南知多郡市龍川洞林山	64
4	金坪貝塚	Ib	シカ・角	?	?	?	?	20+α	?	?	AD3C	未報告	全羅南道宝城郡役所長谷尺嶺里金坪	65
5	金坪貝塚	Ib	シカ・角	?	?	?	?	15+α	?	?	AD3C	未報告	全羅南道宝城郡役所長谷尺嶺里金坪	65
6	龍洞貝塚	Ib	シカ・角	?	?	?	?	20	?	?	AD3C	未報告	愛知県南知多郡市龍洞	65
7	龍洞貝塚	Ib	シカ・角	?	?	?	?	21	?	?	AD3C	未報告	愛知県南知多郡市龍洞	65
8	城山貝塚	Ib	シカ・角	25.0	3.6	6.5	9.0 9.5	21	0.31	?	BC1C~AD3C(AD3~4C)	角枝	愛知県南知多郡市外洞	63
9	龍川貝塚	Ib	シカ・角	23.2	4.0	6.0+α	6.5 5.0	18	0.33	○	AD1~2C(AD4~5C)	角枝	愛知県南知多郡市龍川洞林山	64
10	龍川貝塚	Ib	シカ・角	7.5+α	2.5	3.0+α	?	13+α	0.23	X	AD1~2C(AD4~5C)	角枝	愛知県南知多郡市龍川洞林山	66
11	龍川貝塚	Ib	シカ・角	36.4	3.0	10.0	12.0 15.0	25	0.4	○	AD1~2C(AD4~5C)	角枝	愛知県南知多郡市龍川洞林山	66
12	金海貝塚	Ib	シカ・角	15.5+α	1.7~2.5	7.5+α	8.0 ?	37+α	0.20	○	AD1~2C(AD4C)	一部板状加工	愛知県南知多郡市会岐洞	59
13	附院洞貝塚	Ib	シカ・角	11.6+α	3.3	2.4+α	8.8 ?	5+α	0.48	?	AD1~2C(AD4C)	C地区出土 卜骨(シカ、イノシシ) 出土	愛知県南知多郡市会岐洞	67
14	郡谷里貝塚	Ic	シカ・角	12.0	2.5	6.5	1.5 5.5	16	0.41	X	BC2C~AD4C(AD1~2C)	刀子柄	全羅南道南郡松谷里	68
15	城山貝塚	Ic	シカ・角	20.6	1.5	9.0	10.4 2.8	29	0.31	X	BC1C~AD3C(AD3~4C)	刀子柄 刻線を2度にかけて刻む	愛知県南知多郡市外洞	63
16	金海貝塚	Ic	シカ・角	16.5+α	3.0+α	8.5+α	3.7 ?	24+α	0.35	○	AD3~4C	刀装具?	愛知県南知多郡市会岐洞	-
17	朝庭貝塚	II	ウシ・中手骨	13.0+α	3.0	6.7	?	30~33	0.21	○	~AD2C(BC2C~AD5C)		愛知県南知多郡市影島区東山洞朝庭	69

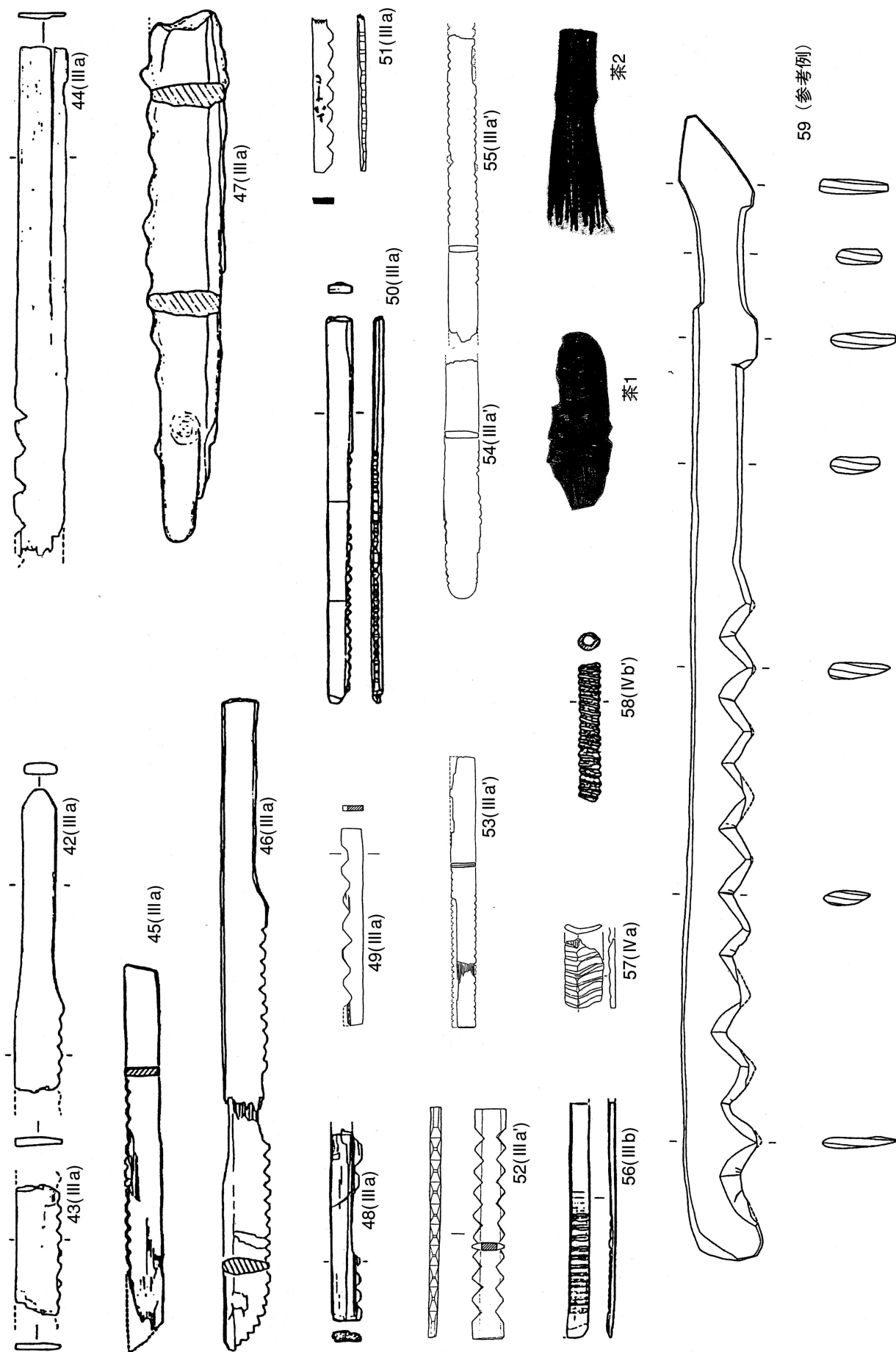
第7表 韓国の刻骨出土地名表



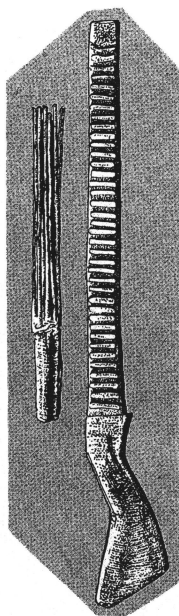
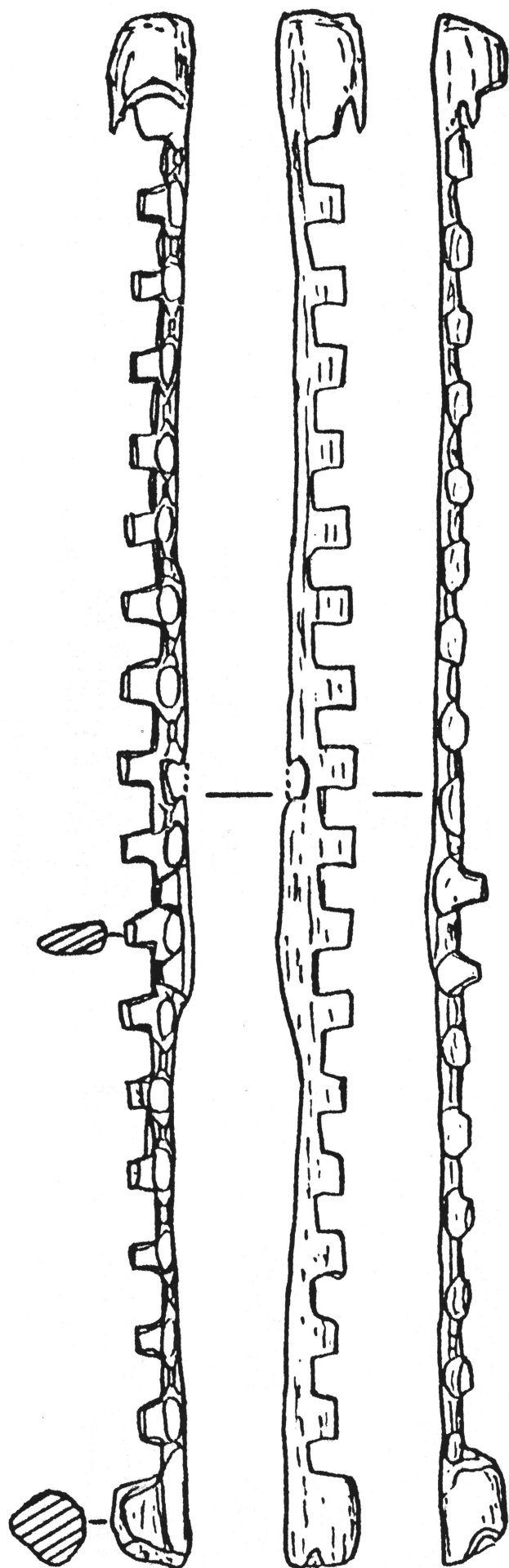
第2図 鋸齒状木製品集成図① (1 : 4)



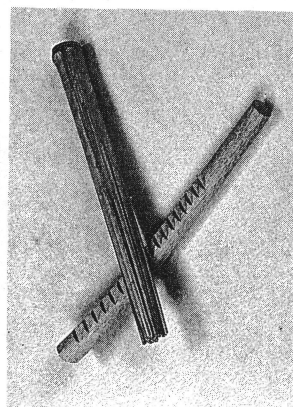
第3図 鋸齒状木製品集成図② (1:4)



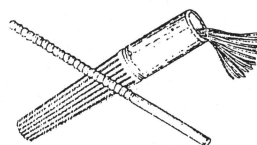
第4図 鋸齒状木製品集成図③・茶筌状竹製品集成図(1:4)



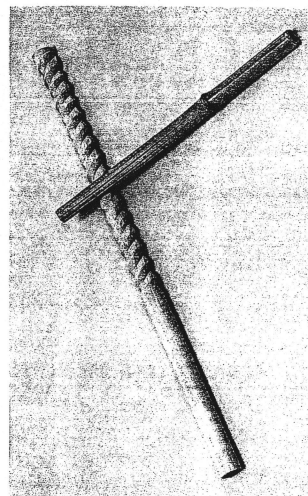
文献90より(IIIb)



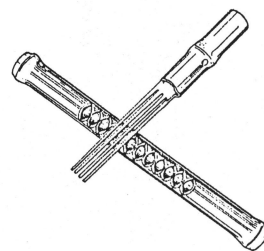
文献54より(IVa)



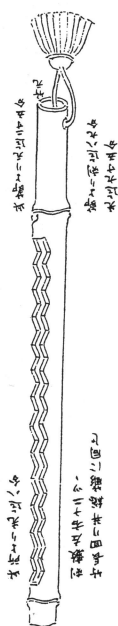
文献91より(Vb)



文献92より(Vb')



文献93より(Va)

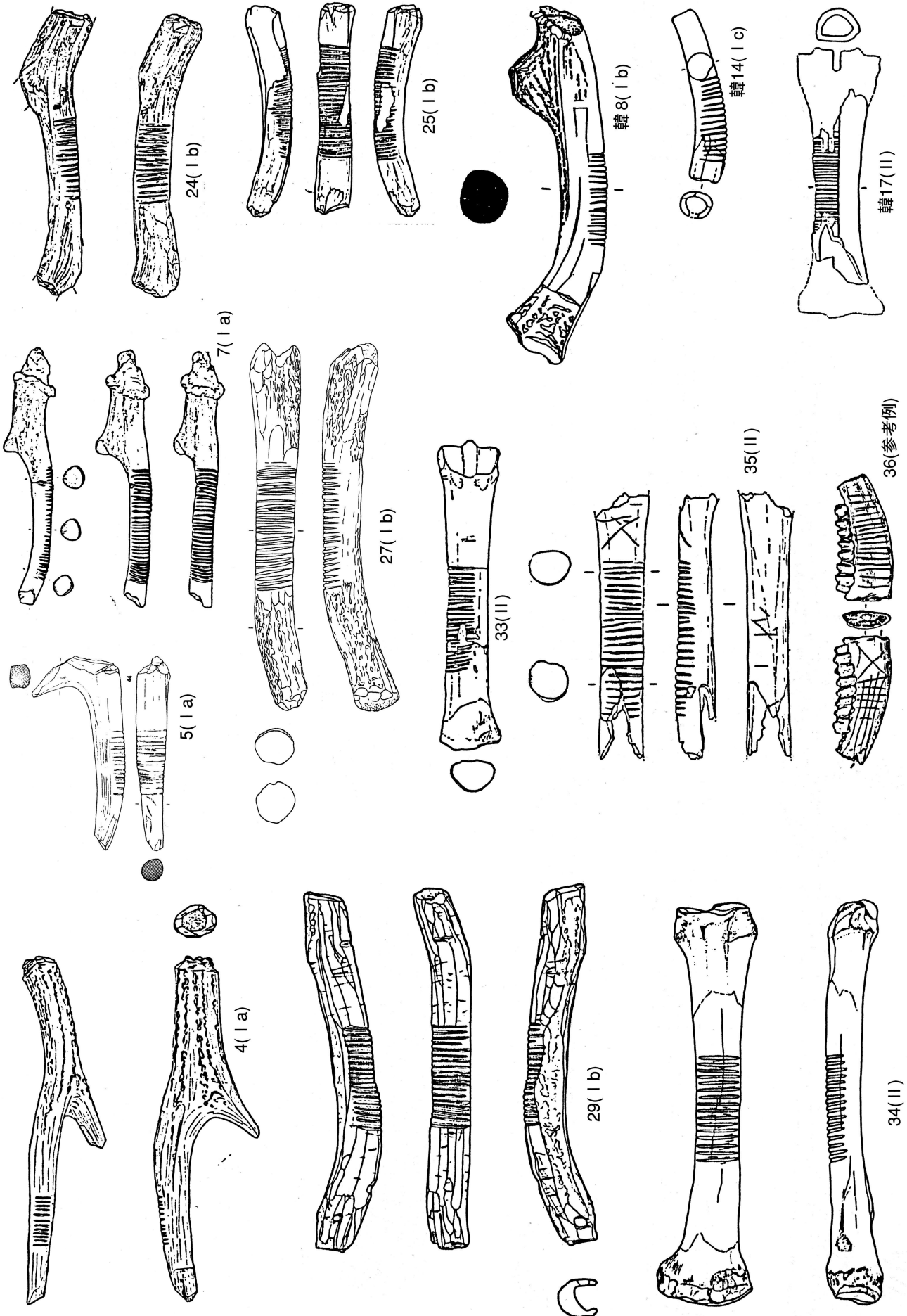


文献94より(Vb)



文献95より(Vb')

第5図 鋸齒状木製品集成図④ (60のみ1:4) ・鋸齒状竹製品各型式代表例図



第6図 刻骨各型式代表例集成図 (1:4)